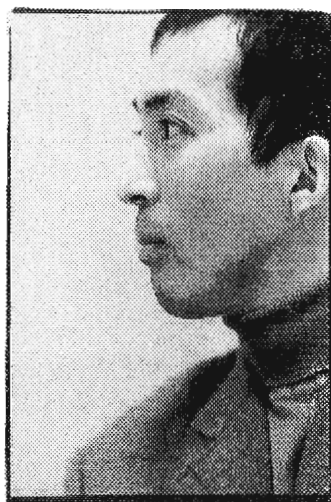


膨張する「携帯」が人間関係を変える

わずか三年間で三〇〇万台も販売され、流通していった製品が
かつてあったらうか。しかもこの「携帯」は、ただの機械ではなく
はじめて個人と密着して行動する双方向メディアなのだ
我々はいま新しいメディアが引き起こす変革の最中にいる

東京大学社会情報研究所助教授。一九六三年三重県生まれ。
筑波大学、東京大学大学院、東京大学助手を経て現職。専攻
はメディア論。著書に『メディアの生成 アメリカ・ラジオ
の動態史』、共著に『メディア論』『メディアリテラシー』な
ど多数。一九九六年八月から一年間、アメリカ・コロンビア
大学ジャーナリズムスクールで在外研究に従事していた。



しみず しのぶ 伸
〈司会〉

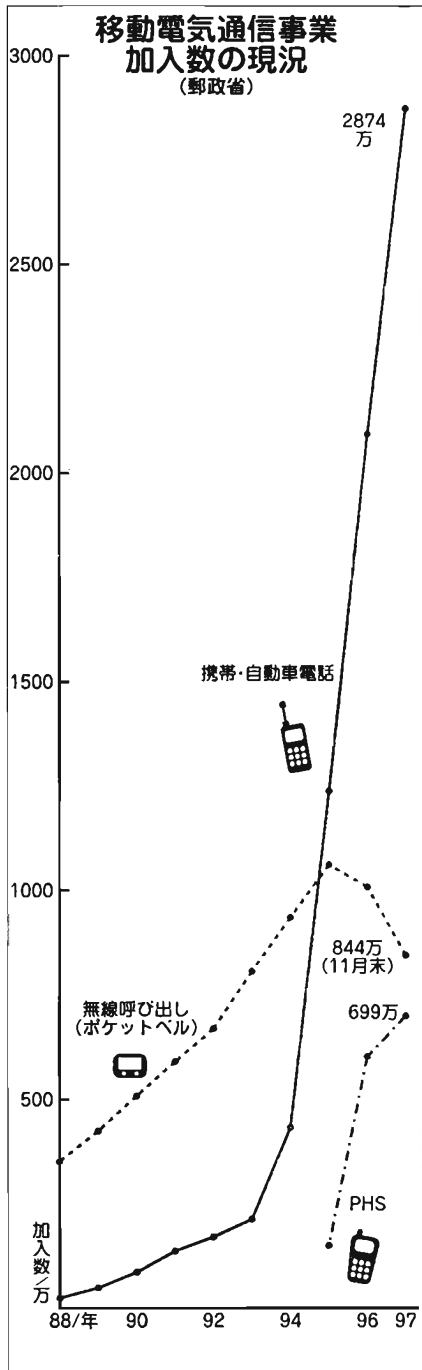
●座談会●

おかだ ともゆき
岡田 朋之



関西大学総合情報学部専任講師。一九六五年大阪府生まれ。
立命館大学産業社会学部卒業、大阪大学大学院人間科学研究
博士課程単位取得退学。専攻はメディア論、文化社会学。共
著に『ボケベル・ケータイ主義』、『現代文化を学ぶ人のた
めに』、『はじめて出会う社会学―社会学はカルチャー・スタ
ディー』など。

移動電気通信事業 加入数の現況 (郵政省)



とみ た ひでのり
富田 英典

撮影・岩橋 昇

まつ だ み さ
松田 美佐



佛教大学社会学部教授。一九五四年大阪府生まれ。立命館大学学造業社会学部卒業、関西大学大学院社会学研究科博士課程単位取得中退。神戸山手女子短期大学助教授を経て現職。専門はメディア文化論、若者論、現代社会学。著書に『声のオデッセイ・ゲイタルQの世界・電話文化の社会学』、共著に『ポケベル・ケータイ主義』、『みんなぼっちの世界』など。

東京大学社会情報研究所助手。一九六八年兵庫県生まれ。東京大学大学院人文社会学系研究科博士課程修了。専攻はコミュニケーション、メディア論とジェンダー論、うわさから携帯電話、ポケベル、そして電子ネットワークへと対象を拡大させている。著書に『うわさの科学』、共著に『ポケベル・ケータイ主義』、『うわさの謎』など。

●——欲望の拡大

水越 僕は、昨年八月にニューヨークから帰ってきて、みんなが本当に携帯を持っていてるなど思ったんですよ。いない間に三倍になってしまった。いまでも、行く前に松田さんが「一〇〇万台になっちゃいましたね」なんて言っていたのをよく覚えてるんだけど、帰ってきたら三〇〇万台を超えちゃって。

岡田 そうですね。昨年の九月末で、携帯電話とPHSを足して三二〇〇万台ですか。

水越 『「ニューヨーク・タイムズ」に日本は移動体通信が、異常に伸びているという話が出てましたよ。

富田 ポケベルも含めれば……。

岡田 四四〇〇万台ですね。昨年十二月の段階で携帯電話が二八七四万とPHSが六九九万、そしてポケベルが八四四万（十一月末）。しかしポケベルは九六年から、PHSは昨年十月から減少傾向にあります。

水越 しかし、CSデジタル放送のパー

フェクトVの加入者数がようやく四〇万を超えたという話なんですけれど。（笑）

岡田 数年前までは、アメリカ、ヨーロッパ諸国に比べると少なすぎたんです。それを急速に埋めた。

水越 人口当たりで言うと、どうなんですか。

松田 普及率で言うといまでは日本のほうが多いでしょう。

水越 でも、まだノキア社があるフィンランドなどの北欧が上でしょう。

富田 たしかそうですね。しかし、日本は迫ってきてますね。

松田 私が最初、研究しようと思ったときは、もう圧倒的に北欧が普及率が高かったですからね。

水越 この欧米とのギャップを埋めてきた急速な伸びを分析したとき、よく一般

に、九四年四月から携帯電話が貸与から買い取りになったこと、複数の事業者の競争によって、機器、通話料とも低価格化したこと、この二つが大きな要因と言

われますよね。

松田 北欧やアメリカの場合、普及のき

っかけは、北欧だったら車が故障したら凍え死ぬ、アメリカだったらハイウエーの真んなかで立ち往生し連絡がとれないとまずいといった、緊急の場合に備えたからでしたけどね。

水越 そういえばアメリカでは、ビル・コスビーの息子がロサンゼルス近くのフリーウエーでパンクを直していたときに、当て逃げされて死んだり、コロンビ

ア大学の名誉教授がノーベル賞を受賞して取材攻勢の直後、ハドソン川沿いのフリーウエーわきで車を止めて、死んでいたことがあったんです。そのときテレビ

で盛んに言われたのが、何か連絡の手段があれば、でした。

松田 九五年一月に阪神・淡路大震災があつたとき、携帯電話を持っていれば連絡がついた、ポケベルがあれば安否を確認できたといった話はありましたよ。

富田 たしか、緊急通報システムといった一人暮らしの高齢者を対象とした首から下げる機器がありましたよね。何かあつたときにそれを押すと、センタリーに繋がって助けにきてくれるものが。

松田 配っている自治体はたしかにあるけれど、よくよく調査すると神棚に上げてあったとか。(笑)

富田 あれは間違えて押したりするんですよ。そうするとバツと人がきちゃう。

それでお年寄りはずごく申し訳ないと思つて、だんだん使わなくなる。民間のシステムもあるけれど、お年寄りに限らず、その意味では携帯電話が、買い切り、低価格の流れを受け、災害対策として

阪神・淡路大震災以降広まったと言えるかもしれないね。たしかに九五年が伸び率がいちばん高いですしね。

岡田 でも、もともと携帯電話を持ちはじめたときって、それが自分にとって必要だと思いませんでしたよね。

水越 そうですね。

岡田 だから、ポケベルにしても携帯電話にしても見落としがちなのは、これだけ電話が広まっている世のなかで、本来は要らなかつたということ。しかし実際に持ってみるとそうではなかつた。

富田 そのとおりです。新しいメディア、携帯電話を持ったがために、いまま

でなかつた欲望が生まれる。知人の親父、七十歳なんですけど、このあいだ携帯電話を買つたんですよ。びっくりしました。目的も何もなしにとにかく「買っちゃつた」と言う。これがいい例とは言わないうまでも、要らない人がどんどん持つようになった。(笑)

岡田 私の場合、親しい人間が持つていて便利そうに使用しているのがすごく——欲望の模倣ではないですけども——ありましたね。

富田 欲望を満たすとさらに携帯電話を持つていない人に対してなんで持たないんだって思つてくる。一年前まで僕も持つていなかったくせして(笑)。しかし持ちはじめると、持つていない不安定な状態でみんなよく生きているなつて思つてしまふ。あれは不思議ですよ。持つていない人には絶対そんな感覚はないだらうけれど。

岡田 学生の話聞いてみると、持つていない友達に対しては、持つて持つてと言っていますよね。

松田 それで考えると、九六年に入つて

からPHSをタダで配りまくつたのは、いい戦略だったんでしようかね。(笑)

富田 そうですね。欲望をつくり出すという(笑)。そういうえば、携帯電話がはじめてタダで配られたのが、ちょうど阪神・淡路大震災のときでした。

水越 そうなんですか。

富田 駅前配つたんですよ。あの後です、配りはじめたのは。

岡田 九五年は携帯電話の加入者が特に関西で爆発的に増えましたからね。いまでも関西は、たぶん地域的な普及率はいちばんでしょう。若干PHSの普及が遅れたというのもあるんですが。そのときにバツと、NCC(NTTドコモ以外の事業者)がタダで配りましたから、それで一気に普及したんです。コスト面の影響は大きいですよ。

富田 しかし、PHSは思ったほど伸びない。いまや減少でしょう。これほどコンパクトにできあがつていると、見ただけで欲しくなると思つていたから、意外でした。持ちたくないという学生もいるし。

岡田 携帯電話も安く小さくなりましたからね。

◎——さらに伸びる？

水越 携帯電話やポケベルと言うと、すぐ街の若い子というイメージがあるじゃないですか。しかも東京、大阪といった大都市のイメージがついている。イメージが絶対ではないにしろ、なぜ彼らに受け入れられたんでしょうか。

岡田 都市のなかを若者が流動しているからこそ必要になったんでしょう。携帯を持つとアポがいかげんになるとか、時間がルーズになると言われているんですが、とりあえず街に出てブラブラして帰っていく、そのなかで友達をつかまえる、そういうメディアとして受け入れられた面が大きい。だから、携帯を持つことで若者が変容したと言われる意見があります。むしろそういう都市に浮遊する文化が広まっていったからこそ受け入れられたように思います。あえて具体的に言うならば、ポケベルがコギヤルをつかったのではなく、コギヤルという都市

に浮遊する高校生がいて、ポケベルを必要としたんです。

水越 そういった都市の若者たちへ行き渡ったのか、全体的には伸び率は鈍化していますね。このまま、どのくらいまで拡大できるんでしょうか。たとえば、地域的にも、都会だけでなく田舎でも普及していくのか。日本の田舎では、いまでも共同体のなかで暮らしている「伝統的な社会」がありますよね。そこに非常に個人的なツールが入っていくことができるか。

富田 車と同じようになる感じはちよつとするんです。都会の人のほうが車を持つているイメージが強いけれど、実際は田舎の人のほうが車を持っていたりするでしょう。

水越 二台は当たり前という。

富田 家にね。だから、田舎で一人一台みんな携帯電話を持つことを考えると、もつと普及していくでしょう。

岡田 新しい技術の影響もあるでしょう。たとえば、もう始まりつつあります。が、モトローラ社によるイリジウム計

画。この地球上に六六個の衛星を配置し世界中どこでも通信可能な衛星携帯電話が普及すれば、いままで絶対使わなかったところで一気に伸びる可能性もあります。地上のアンテナでは届かなかった地域に、衛星から電波を届けるのですから。山間部などではとくにね。

富田 そういう意味ではもう一つ、海外でも交信できるシステムができるかでしょう。現在の日本におけるPDC方式の携帯電話は国内しか使えないですからね。

岡田 現状は、日本、アメリカ以外でGSM方式が普及して世界標準のようになっているじゃないですか。だから、いまNTTなどが次世代の携帯電話のシステムとして開発中のCDMA方式がどこまで世界標準となりうるか。これが影響を与えらんじゃないでしょうか。

水越 海外でも持ち歩きが可能になるとね。

松田 ハワイなどでは、ビジネスマンのために空港で携帯電話を貸し出していますよ。ハワイに限らず、そういったとこ

ろで中高年層が便利だと思おうようになれば、日本で使用している携帯電話をそのまま持つて行っても使えるようになることは、かなり普及に貢献しそうですね。

富田 そういえば、電子メールの送受信ができることをうたい文句にしている携帯電話があるでしょう。まるで世界中で使えるような雰囲気を漂わせているけど、あれはおかしいよね。インターネットはたしかに世界中でやりとりできるんだけど、その携帯電話自体は国内でしか使えない。(笑)

松田 海外ではまったく使えない。

富田 日本のいまの携帯電話の限界でしようね。

◎ 固定対携帯

水越 この携帯電話、PHSの普及で、固定電話(加入電話)の伸びが非常に鈍化しているんですよ。

岡田 そうです。解約が多いみたいですね。この携帯電話の爆発的な普及も、固定電話の契約数(六一二四万/九七年九月末)を超えられるかどうかに関心がいき

ますね。超えたとき、それが一つのメルクマールになると思います。

富田 いま地方から大都市に就学する学生は、固定電話ではなく携帯電話やPHSを選択するんです。それを就職してもそのままずっと持つ。一度家を出たら、もう固定電話なんか縁がなくなってしまう。

水越 次は、結婚してまがりなりにも家庭を持つとき、どう対応していくかでしょう。

岡田 あと大きいのは、データ通信の問題です。つまり、固定電話でもいま太い回線で短時間に大量のデータを送受信できるISDN(デジタル総合サービス網)の需要はけっこうあります。しかしもし開発が進んでいるPHSのデータ送受信が、同様の速度で可能になったときどうなるか。

富田 いまたしかに、契約時七万円という固定電話の料金をどうするかという議論があります。つまり、この価格が続くと固定電話は必要とされなくなるとい

のか、やはり信頼性のためにもこの価格での固定電話でいいのではないかという意見です。僕自身は、固定電話が信頼できるとは思えないし、いまですら家の電話をあまり信頼していない。むしろ本人が持っている携帯電話を信頼している。とにかく、今後変化していく可能性は非常に高いと思うんです。

水越 おじさんたちはとくに信頼していませんよ。

富田 信頼していないから携帯電話で会話をするおじさんたちの声は大きいんです。メディアに対する信頼がないから若者よりついつい大きい声で会話してしまう。さらに、あの世代は、相手に対して誠実であるうとしますから、まわりが迷惑するほど大きな声になる。

水越 相手に失礼があつてはいけな

富田 そうです。対照的に若い世代が必要以上に声を出さないのは、携帯電話の向こうより自分の周りを意識しているからと言えらると思います。

いるものの、減ってはいないですよ。

岡田 いまは比較的安定して併存している状況だと思ふんです。つまり、ポケベル番号と携帯番号と家の番号をいくつか持っていてそれを段階を追って教えていくというスタイルがあるんです。そうやってフィルターにしていくといつた……。

水越 深度を設けるわけですね。

岡田 ええ、そうです。それを人づき合いの深度と連関させる。人によつて、たとえば家の電話を教えるほうが親密である場合もあるし、携帯電話を教えるほうが親密である場合もある。そういういくつかのチャネルを使い分けることによつて、人間関係をそれにリンクさせている。

たしかに家庭とコミュニケーションという位置づけで言うと、いわゆる「家族崩壊」「家族解体」などと言われている、そのなかで家庭内の固定電話という意味合いは薄れていくかもしれません。しかし、固定電話自体がなくなることはおそらくありえない。家庭以外の事業所の電話は、組織であるとか集団とか団体に帰

属しているものですから、やはり残っていくものでしょう。それがたとえば電子メールに置き換わるとかになると、また話は別なんでしょうけどね。

◎ 日本的なるものなのか

水越 みんなが持つから僕もといった欲望は、やはり日本の場合とくに強いと思ふんです。ニューヨークではそれはない。そういう欲望を持つのは、ミッドタウンのビジネスマンぐらいですよ。マン

ハッタンでほとんど携帯電話をかけている人はいない。危ないんですよ。あれは隙を生むじゃないですか。ぶん殴られるとか、物を取られるといった。そういうえば、九六年全米で販売されたノートパソコンの三分の一が盗まれてるんですよ。(笑)。そうなるも、もう公共財ですが。

富田 みんなのもの。(笑)

水越 そうそう、駅前の傘を持っていくのと同じ話なんですけど。でも、アメリカ人の場合、みんなが持っているから自分も持つという感覚があまりないし、小型高性能なものを「へー、いいな」という

感覚もあまりない。

富田 日本独特の感覚……。

水越 日本だけではないと思うんだけど。でも、アメリカ人は携帯電話に対して日本人のようなコンパクトなものはいない、といった特別な思いこみはないです。電子手帳にしても、アメリカの場合、基本的には大きいほうがよしとされる。典型はオーディオ機器。ラジカセもステレオも、いまだにバカでかいやつが応接間にドーンと置いてあつたりする。

岡田 それは大きさに対する信頼感みたいなものですか。車でもそうですけど。

水越 うん。だから、非常に日本的に言えば古典的な記号だよね。まあモノの大きさの感覚が根本的に違うんだろし。不思議なのは、韓国がアメリカに似ているんです。でかいのが好き。だから、車

の場合、コンパクトカーや5ドアはだめで、セダンとかが好まれる。同じようにパソコンも、ノートパソコンではなくてデスクトップが売れる。

松田 韓国は携帯電話の大きさはどうなんでしょうか。

水越 携帯電話はたしか日本と似たようなものだったけど、僕が携帯電話を見たのは九六年の正月ぐらいだから、だいぶ変わったかもしれない。でも、外国から

日本の急速な携帯電話の普及を見て思ったのは、これはかなり日本的なモノ文化であるということ。それはアメリカや、ポードリヤールのいるフランスは田舎で、日本が非常に高度消費社会化していると言えるかもしれない。外から眺めていると日本は凄くとんがって進んでいるなという感じがするんです。この差は、携帯電話やPHSの技術的な規格、貿易摩擦、若者文化の違いなどを含めてね。

富田 そのとんがりはたぶん、これほど情報化されてもあくまでも島国・日本のなかで思考し進んでしまう、よその影響を排除しながら進んでしまうからでしょうね。

水越 あまり日本特殊論は好きではないんですが、それが基本でしょう。しかしほかにもたたくさんの理由があつて、とくに日本が戦後一貫してすごく安定——も

ちろん他国に比べてという意味ですが

——していたからだとも思うんです。そしてその徒花として出てきた。もう徒花ではありませんが。

たぶんこの日本的かつ個人のメディアとしての携帯が普及した下地は、デジタル腕時計が出てきた七〇年代後半くらいからあつたと思うんです。大量に生産が可能で小型にしてシステムティックにまとめられ完全に個人を意識したモノのはじまりとしてね。それがウォークマンに繋がって、あちこちに火がついた。そして九〇年代、ポケベルや携帯電話で花開いたと言えなくもない。しかもこれがコミュニケーションツールであつて、日本の独特の都市社会とリンクした。

富田 実は僕もポケベルが友人関係を繋ぐツールとして高校生に広まったとき、海外ではどうなのかなと思つたんです。そしたらやはりこれは、日本独特のようなんですよね。このあたりをもう少し分析したいなとは思っています。

◎——パブリックとの関係性

水越 僕は外国と日本でいちばん違うと

思うのは、地下鉄における雰囲気ではないかと考えているんです。日本の場合、たくさん広告があつて、本やタブロイド新聞を読んでいたりと、それからパソコンを使ったり、俳句を書いている人などいろいろいる。つまり、パブリックとプライベートが溶けてお風呂になつたような、心地よいだるさがある。対して欧米やアジア諸国では、じーっとお互いを見て、目が合うとニッコリ笑うもの。「こいつ、悪いことしないだろうな」と思っている状況がある。たぶん携帯電話の使われ方も関係あるような気がするんです。

たとえば、香港の地下鉄でガンガン携帯電話がかかっても怒らないのは、みんな商売のことを考えてるからみたいだね。やはり日本の特性があつて、そこで新しいメディアとしての携帯電話やポケベルの普及があると思うんですよ。

富田 日本では地下鉄の場合、基本的にはかけられないし、なんとかプラットフォームでPHSが使える状況ですよ。そういう意味ではこの間、僕らのなかで通

動列車内で携帯電話を使うのを禁止するのはどういふことなのかと話題になったんです。

松田 最初は九六年四月から小田急、京成、そして六月に東急、京急。

富田 携帯電話を列車内で使つてはいけなと決められるようになって、僕にも電話の取材がかかってくるんです。けれどそれは東京の話であつて、関西では比較的自由に使つてるんです。

水越 香港などではガンガンかけてましたが、世界的に列車内で禁止の方向にあるのは日本、とくに関東だけなんですよかね。

松田 関東では「このような状況では使うべきではない」といった基準が議論されることなく、「上から与えられる」つて感じですよ。

水越 僕は、携帯電話が公共の場で禁止されることを、そのとおりでだと思つて、そこまでクリーンにしていく必要はあるのかとも思つてます。新しいものに対して公共の秩序の面から排除していく、相対的に言えば日本的なノイズをな

くしていいものか、とくに東京的だと思つてます。

富田 電車のなかで話せる人と、話しているのを聞いてすぐく腹立つ人とありますよ。

水越 寝入りばなにやられると腹が立つんだけど、そうでないときは何も気にならなくなりました。まだ生理的に奥底まで馴染んでないという気がしますけど。まあ、入らないと言えば、デイズニールンドではPHSが入りませんね。

岡田 「非日常空間」を保つためでしょう。

松田 なるほど、電車も「非日常空間」なんですよ。(笑)

水越 しかし、かかってくるものはしょうがないのであつて、そうだとすると、そのうち携帯電話がかかってくるように整備された空間がブレステージになったりするかもしれないですね。「これは本当にかかってくるんですよ、エ」とか言つて。

岡田 実際、鉄道会社で電波を通さないシールドガラスの研究をしているところ

があるそうですよ。

松田 あと、ホテルと病院でも進んでます。

水越 日本人がよく考えますよね。コチョコチョ、コチョコチョ、細かい排除の構造のためとかなんかつて。(笑)

富田 けれど、使つている本人にとつてもかかってくるまで低くないときは電源を切りますよね。周りの事情は別にして、気分的にいまだれとも喋りたくないというときは切るはずですよ。携帯電話を持つことによつて、いままでは思わなかったんですが、電源を切つたら一人だと思える(笑)。いままでは別に何もなかったけど、携帯電話を持ったために、電源を切れば「ああ、一人」という実感が持てるんですよ。

水越 たぶんそれつて、空間のブレステージと相対の話ですよ。日本ではこれからそんなことが起こってくるでしょうね、きつと。

◎——稀薄なメディアとしての意識

富田 日本独特の感覚の話になりました

主要鉄道会社の携帯電話への対応

◎列車内での携帯電話に対するアナウンスについての調査。「ある」と記しているのは次のアナウンス「携帯電話のご使用は、他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください」。「容認」はアナウンスはあるものの使用を否定していないもの。

	対応	開始時期
関東)		
JR東日本	ある*1	97.4.14~
小田急	ある	96.4~
京王	ある*2	97.6.20~
京急	ある	96.6~
京成	ある	96.4~
西武	ある	97.4.16~
東急	ある	96.6~
東武	ある	97.5~
相模鉄道	ある	96.12.25~
東京モノレール	ある	97.4.~
JR東海	容認*3	
関西)		
JR西日本	容認*4	
近鉄	容認*5	
京阪	なし	
京福	なし	
南海	ある	96.10.26~
阪急	なし	
阪堺	なし*6	
阪神	なし*7	

地下鉄)
関東の営団、都営、関西の大阪・京都市営ともアナウンスなし。

*1新幹線・在来線とも。また満員時のみ「ベースメーカーの誤作動につながるのご遠慮下さい」97.7~。*2それ以前は「他のお客様の迷惑にならぬようにお使い下さい」だった。
*3「デッキでおかけください」(新幹線・特急)90.3~。「他のお客様の迷惑にならぬようにお使い下さい」(在来線)97.7~。*4「デッキをお願いします」(新幹線・特急・急行)90.9~。「迷惑にならないよう控えめにマナーを守ってお使いください」(在来線)96.6~。
*5JR西日本の在来線と同じ95.7~。*6今後行なう方向。*7キャンペーン中のみ行なっていた。今後行なう方向。

が、本質的にはアメリカのように国土の広いところにバラバラ住んでいるところで使う携帯電話と、香港なども当てはまるかもしれないが、日本のように密集して人が住んでいるところで使う携帯電話は、意味が違おうと思うんです。この密集した都市空間でどのように携帯電話を使うのか。まあ、そのあたりを考えて『ポケベル・ケータイ主義』という本も出したんですが。

水越 売れたんですか？
富田 詳しい数字は聞いていません。
水越 あの本は、携帯電話という新しいメディア、それに携帯メディアと人間の関係性についての本でしたよね。ただ、九〇年代に入って『声のオデッセイ』『メディアとしての電話』といった電話をメディアとして研究する流れがようやくできてきたと思うんです。まだ足腰が弱いんでしょうね。
富田 まだ急激に発達している段階のメディアですと、そっちに目が奪われ、内実を分析した本ははまだ理解されていない感じがします。
岡田 根本的に、学生などでも電話やポケベルをメディアとして意識できていないんです。
水越 そうですね。一生懸命講義した学

期末に「電話がまさかそんな重要なメディアとは思いませんでした」といったレポートが返ってくるのがよくあります(笑)。メディア論的なものの考え方の転換が、若いからあるというわけではない。
富田 やはりテクノロジーの発達ばかりに目が向き、社会が変化していくことにまだ目がいつてないんです。実際はいろいろなことが起こっているんですけど。テレビや新聞のメディア研究には目がいくのに、どうして通信のほうには目がいかないのでしょうかね。
松田 たぶん、中身がないと思われるんでしょう。学生の話の聞くと、ただのコ

ミニケーションの道具より、テレビやインターネットなど、なにかを見ることに興味があるように感じます。それこそメディアリテラシーの話ではないんです。自分が発信者になる状況を想定するよりも、受ける・見る・聞く——という受け手の立場でしか考えられない。自分が情報発信をしているという意識が薄いんです。携帯の本当の面白さは、双方向なところなのにな。

岡田 そういう意味では電話、とりわけ携帯電話は、鶴見俊輔さんの言う「限界芸術」と同じ意味で、限界メディアなのかもしれません。いまメディア論の研究は、要するにメディアの伝える情報に関する研究が中心ですが、もっと広い意味でのメディアの受け入れられ方、実際のメディアへの接し方といった研究、議論が必要なんですけれどね。

◎——携帯電話の未来

水越 ところで、携帯電話、PHSともここ一年ぐらいで、数的拡大のみならず、テクノロジーの発達による軽量化、

機能の拡大、PDAとの合体など見られますが、さらにどう発展していくと思えますか。

岡田 機能同様に形状なども変わっていくと思うんですが、いまの形はまだ固定電話のイメージを引きずっていますよね。まずそれをなんとかしてほしい。たとえば、本来携帯電話は個人が持ち歩くものですから、呼び出し音を必要としないはずなんです。バイブレーターなどの機能は、いまではほとんど機種に付いていますが、音はなくてもいいと思うんです。

水越 本当にそうだね。

岡田 学生に電車内で携帯のなかが迷惑かアンケートを採ると、話し声と並んで多いのが呼び出し音です。突然どこかからないところから鳴り出す。これは、心身的にすごく不快なものだと思うんです。電話自体、もともと共同体などのある場所に置いてあって、そこにいる会社や家庭のメンバーのだけかが、鳴った時点で取る、というものでしたよね。半分義務のように。その意識が我々のなかに

まだ共有されている。だから、鳴ったとき「あつ」と一瞬思うんです。

松田 たしかに既存のイメージに引っ張られがちです。変なたとえですが、いまの小さい子はブッシュホン方式の電話しか見ていないから、ダイヤル方式を見ると、回さずに押ししてしまうという話がありますよね。(笑)

水越 うちの子供が研究室でやっていますよ。(笑)

松田 そのぐらいのことを生むドラステックな変化を期待したい。

富田 そういう意味では、もうアナウンズされていますが、画面が付いたPHSが出ますよね。

水越 わかりやすいですね、カメラが付いて電話が付いて。

富田 テレビ電話は家で使うというイメージがありました。が、街中で携帯・PHSテレビ電話が普及したときどうなるか。予測が付きませんね。まずテレクラなどの風俗関係から普及していくのでしようけれど。

松田 しかし移動できるテレビ電話に

は、自分の顔だけでなく、仕事先や旅行先の風景などを相手に見せることができ。これは大きな変化を生むかもしれませんが。とくに生まれきたときからカメラやビデオに慣れてきた若い世代にとっては受容されやすいでしょう。

岡田 パソコンと比較して考えると、いままで、パソコンが、マルチメディアの先兵とされてきましたが、なかなか一般・日常生活レベルに浸透しない。そのなかで携帯がこれだけ普及している。しかも、携帯電話やPHSに文字送信機能が付加されたり、ますます複合化したマルチメディアの道具になりつつある。まだまださまざまな機能の付加の可能性を秘めていると思います。たぶん携帯電話、PHS、ポケベルが、個人と密着して行動するメディアとしては、はじめて生まれたと思うんです。このさらなる発展が、社会、人間のコミュニケーションを大きく変える可能性をはらんでいると思いますよ。

水越 いまではまた、バラ色の未来と言うよりは、持つことに対していかがわし

い話がつきまよったりするけれど、マルチメディアの旗手のようなイメージが強くなって、いかがわしいイメージは相対的に減っていくんでしょね。

岡田 最近ポケベルや携帯電話で直接電子メールを扱える端末が売り出されてますけど、あんな形でインターネットがずっと身近に使えるようになると、状況も変わってくるんじゃないでしょうか。

ネットワーク上の新しい人間関係の可能性として、「ネティズン」(ネットワーク市民)とか「オンライン・コミュニティ」とかいった言葉が登場しているなかで、まだまだ限られたパソコンユーザーのものでしかない現状があるわけです。でも、高校生の間で拡がっている「ベル友」(ポケベルだけを通じて知り合った友達)って、そんな新しい関係の先駆けだったと私は考えているんですよ。だとすると「ベル友」も「ネティズン」もまだ一般には馴染みがないですけども、そう遠くないうちに、案外当たり前になるかもしれないですよ。

松田 私の友人たちは、このところ子

供を産む人が多いんですよ。そうすると、結婚してこれまで二人とも携帯電話などを持ってなかったのに、夫が持つ。それは本当に「家族のメディア」なんですよ。(笑)

岡田 家族がすごい病気をして重い状態になると持つとか、そういうのもあるみたいですよ。

水越 しかし病院が「電話してくれな」と言うんだよ。

富田 でも、病院こそ使えるように工夫してほしい、それこそメーカーがね。

松田 それに、ベースメーカーだって機器のほうにシールドを付ければ、ベースメーカーを利用している人でも安心して携帯電話を使えるようになってよいと思うのですが。

富田 だから本当は、JR東日本がやっているようにだけれど「車内のご迷惑になりますから」じゃなくて、たとえば「ベースメーカーをしている人がいるかもしれないので電源を切ってください」と言えればいいのにね。それは車内で流さない。そのほうが問題なのにね。(笑)